玉名の遺跡
シリーズ⑰

どうだぬきかたなかじあと
同田貫刀鍛冶跡

玉名市亀甲所在

【お問い合わせ】
玉名市教育委員会
文化課文化財係
TEL:0968-75-1136
bunka@city.tamana.lg.jp

「同田貫」とは、かつて玉名で鍛刀（たんとう）した刀工（刀鍛冶）の一派が名乗った派名のことです。鎌倉時代頃に菊池氏が山城（やましろ）国（京都府南部）から招いた延寿（えんじゅ）の分派として起こったのが同田貫とされ、その後、初代正國ら刀工たちは玉名へ移住してきます。玉名市亀甲には、歴代刀工たちの墓地がありますが、その背後にある広場が、かつては刀鍛冶の作業場であったと考えられます。この一帯は以前から鍛冶に関連する、ふいごの羽口や鉄滓（てっさい）などが散乱しており「肥後同田貫跡」の石碑も建てられています。今は市街地になっていますが、ここは刀工たちの息吹が聞こえてきそうな場所です。

ここで生まれた“折れず、曲がらず”の名刀。
そして、歴代刀工たちが眠る場所。

同田貫刀鍛冶跡と歴代刀工の墓位置図

散乱するふいご羽口

散乱する鉄滓

出土した鍛冶関連遺物

■肥後同田貫歴代刀工の墓

初代・正國の墓碑

初代・上野介正國の肖像
（市歴史博物館こころピア寄託）

市内には刀鍛冶同田貫の子孫にあたる小山家がありますが、「肥後同田貫跡」の石碑は旧小山家の裏に位置しており、初代上野介正國ほか再興させた９代政勝・10代宗廣を中心とする刀工一門の墓碑が残っています。

玉名市亀甲で鍛刀した同田貫の初代を正國といい、その兄とされる清國も玉名市伊倉で鍛刀していました。いずれも加藤清正から一字ずつもらったといわれています。清正の入国後は抱え工となり熊本城の常備刀とされ最盛期を迎え、同田貫は豪刀武用刀として知られました。

刀鍛冶跡の調査

DOUDANUKI

一帯は、弥生時代の亀甲遺跡としても包蔵地となっており、これまで５地点において確認調査をしています。いずれの地点においても、鍛冶関連遺物が出土しています。なかでも平成 20 年度に実施した調査区においては、トレンチ内でピットが検出され、内部からふいご羽口と共に近世の陶磁器が出土しています。調査地は周囲に比べて一段高く整地されており、本来は鍛冶場としての建物があり、不要となったものは廃棄されていたものと考えられます。鍛冶場は現在、駐車場となっています。

同田貫刀鍛冶跡（H20 年調査区）

鍛冶跡周辺出土の陶磁器

同田貫一派が玉名に移ったのは天正 16（1588）年頃とされ、慶長期（1600 年代）に最盛期を迎えます。その後、1765 年頃には一時衰退。そして寛政期（1800 年頃）に復興、政勝・宗廣といった名工が生まれ、明治期まで活躍しました。

▲同田貫刀鍛冶跡出土したふいご羽口

▲鍛冶跡から出土した鉄滓

日本刀の材料となる鉄素材は砂鉄で、日本古来の「たたら製鉄」によって作らたのが玉鋼（たまはがね）です。一振りの刀を作るには、7～10 kgの玉鋼が必要とされ、それを刀工が鎚（つち）で叩き鍛え上げました。

ふいご羽口の分類

出土品は内径 2 ㎝前後

●製錬用……３～４㎝

●鍛冶用……２㎝前後

刀をつくる

■同田貫の特徴■

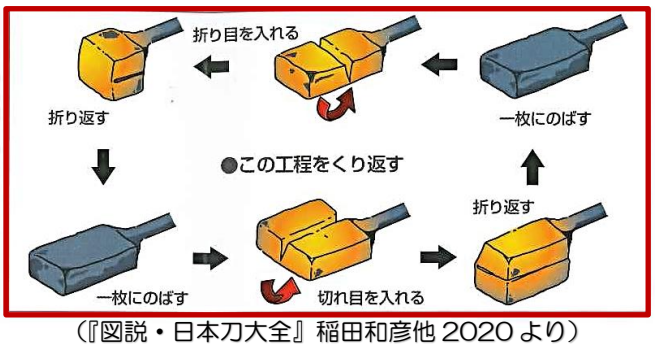
明治天皇の御前で行われた「兜割り」が有名で、“折れず、曲がらず”の剛刀。身幅が広く美装よりも実用本位に鍛えられたところにあるといわれています。

▲かつて同田貫鍛冶場で使用されていた「焼き入れ」用の水槽

“ふいご”とは、炉に対する送風装置（空気ポンプ）のことで、それと炉をつなぐものが羽口です。炉は壊されますが、羽口は残りやすいため、多く採集されています。当地の羽口は内径から鍛冶用であり、製錬は別の場所で行っていたと考えられます。

“折り返し鍛錬”

世界でも類をみない日本刀の地鉄の強さは、この折り返し鍛錬の繰り返しによって生み出されました。



（『図説・日本刀大全』稲田和彦他 2020 より）

“相槌（あいづち）を打つ”

タイミングの難しさは、経験と集中力が必要。

”焼き入れ“

この瞬間、日本刀独持の反りができる。

約 800 度に熱した刀身を一気に水に入れて冷却。刀工が最も神経を使う。